



「人は転がる坂のせい 坂がないと石のせい 石がないとクツのせい 人はなかなか自分のせいにはしない」 これは森繁久彌さんの言葉です。

「人の間諒」出合ったときも思わず笑つてしまふしたが、日常生活ではよくあら自分の姿でもあると感つたのです。誰かのせいでしないと気が沿(おど)まらない」ともあり、時には夫婦喧嘩にまで发展してしまつて「それもあらの厄介な思いなの」。

例えば食事の準備中に誰かが食器を割つたとします。それを見ていた家族の誰かが「あああ大事な食器を割つて」と叫つて相手を攻めたりしますが、しかし、自分が割つた時にめぐりの言つてはよつてしまつてはならないと無意識でしょつか。多分ひとつや」「ええ、割れた」「割れちゃつた」と無意識に言つてしまつてはならないと無意識に思つてはならないのですが。

仏教には「縁起」という考え方があります。「縁起」とは「因縁正起」という言葉を省略した言葉ですが、正起(結果)の背景には、その直接的な原因因と、直接的な原因に関わる間接的なものもろの縁があるといつのです。時間であつたり、場所であつたり、天気であつたり、気分であつたり、その他もろの諸条件(縁)が重なり合つて正起となるのです。

自分は正しく。相手が間違つてしまつては、安直な因果関係の捉え方は、時じつて争つての原因にもなりかねません。互に尊重し合える関係を「因縁」という言葉を通して育んでいきたいのです。

※種から花が咲くのは、種(因)だけでなく、土、水、光、人による世話(縁)など、多くの条件が揃うことで初めて実現します。



私は平成7年(1995)の歳を过了ました。今にして思ふと、平成7年に設けた10年田標が、私の精神を立て替へたかはしなったことはよく分かってます。今ではその顛末を記述し、心の立て替えが思いがけないこと(?)に存在するものであることを紹介をせいでいるだけです。

当時、還暦を迎えるにあたつて考へたことは、60歳を境に老後の生活に向かうのだから、やれどやれわざと生き方をしなければいけないとした。これまで思つて巡らすいじで考へたのは、「10年田標」でした。これまで取り組んできた実行田標は「1か月」とか、1年田標でしたが、これからはもっと大きな田標を掲げて10年単位で取り組むことにするものでした。10年田標は「自然観照」に定めました。これは田原自然を觀察する習慣があつたので、10の際じつくり自然の様々を注視してこうるものでした。例えば「家庭菜園」に取り組む中で、日々思つてはなつたのは、陽光の照りや多大な恵みでした。今でこそ自然破綻に苦しむ日々ですが、本来は朝に現れ、夕日に沈む慈悲深い自然の恵みでした。その頃から身に立つて自然の慈愛に心奪かれる習慣が身につくようになりました。10年した経験から「自然がもつ膨大な慈愛」に田原が身につくようになりました。

70代の10年田標は「一切他力」でした。自然観照の成果として、自然界のすべては、自然の力、自然の働きであるとの田原が深まり、一切他力の視点になりました。80代の10年田標は「敬虔(けいけん)感謝」でした。60代、70代を通して深く田原したことは、護られた生かされた命の尊難でした。毎夜床に就くとしづかく、毎日1日を振り返り、すべて護られた命を噛みしめ「敬虔感謝」の念を篤くむつひと時を過ぎました。生活の中で区切りある10年に護られた命を思ふ味わい、念仏と共に「敬虔感謝」を噛みしめ日々を送れるようになりますました。10年して65歳頃になつて深く寂れてしまったことは体調がじよじよ元気となり精神状態も明郎清新を持続できるようになつてしまつたのです。10年して心身の状態を健康に保ち、老化を意識の内にしなべ元気な日々を送る事ができるようになりました。90代になりました。今日もおかげさまで健康そのものの日々を送っています。「敬虔感謝」は高齢期の心身を健康に保ち、最高の心情であると確信してこの次第です。



# 七十報恩講

十一月廿四日(日) 午前・午後

お説教

先日朝ごとに連絡申し上りましたように、本年の報恩講は市のマツン

ン大念と申すが重なり、第一回曜から第二回曜に変更となりました。

お念の教えを聴聞し、日々の生活を振り返し、一年で最も大切なお仏事です。

「門徒の家々におこしむ「お取り越し」とこの名称で勤められてますが、お取り

越しとは「報恩講」の別称です。親鸞聖人の「俗田がぬぐい之前に取り越して

勤めぬ」とからぬの呼び方なのです。

午前は寺族による法話、午後は教順寺住職の法話をお予定いたしました。また、当田には「門徒總会」も予定しておつまむので、かわゆい門徒の皆様に「参拝」ただけますよとお願い申し上ります。

おみがき…十一月一日(日) 皆様の協力をお願いいたします。

「お持手口」の御年記念。//「ハカート開催

光嚴寺

十一月十一日(木) 一時半～二時半

十一月には三日を迎える「お持手口」。法輪に参加していただきながらして続けてもらいました。おかげもありの方に参加していただきありがとうございました。

ミニ法話

近藤龍譲氏 廣尊寺若院

ハクトーン演奏

柴間麻梨絵氏 光嚴寺若坊守

仏教讃歌はじめ、みんなで歌う歌かして歌謡曲めで幅広く演奏する予定です。お待ちしてます。



# 御翻訳のご報告

十四十八日(土) 午後二時～三時半

この日は「歎異抄」第14章についての説明でした。

この章におかげ歎異(異なる)とを嘆くは「極無回向陀仏」と一起念仏すめじとによつて、「十億劫とこの果しなく時間に私が犯して来た罪を一気に消滅させり」とがであります。そこで、この「解説」についてでした。

紙面の関係で詳しく述べは説明でもせんが、念仏を称えて罪を消すと物語るのを、自力の発想であり、他力を説く親鸞聖人の教えとは異なると云ふ事です。聖人の同じ教えを聴いた人の中でも、受け止め方によると、大きな差異を生んでしまつていてこりの事なのです。

それで私たちの称えの念仏とはこりたゞらのものなのか。またそれによつて救われるとはじつこりのもののか。そんなことを考ふる事になりました。この参加しておいた皆様に「お念仏はじんな時に称えますか」とお尋ねしたところ、感謝の思いが湧き起つた時、お持や仏事の縁あつた時、拙しき惱み一事があつた時等これらと聞かせてくださいました。

本会は単なる知識を耳に着けた学習の場ではありません。自分の生をかがへねでよこのかと仏様の教えと願いを聞いてじく歩みの場となつてしまふ。

じむに悩み、苦しみなばかり、仏やまかひ思ひて眼をいただいて意義ある人生を歩んでこりとしこね所です。

皆様にむせらお法輪に「」と参

加いたたかたと願つてこねのです。



# 今月の掲示板

美しい景色を探すな

景色の中に美しいものを

探すのだ。



犀川提

あなたの求めでこねむのせ、じこなに遠くへ行ひしむ町の山川といはります。それが美しい景色であつても幸せであつむ回りじだ。

それは特別なじいじのものではなく、あなたのあぐそばにあるなまきだ。

皆様にむせらお法輪に「」と参

加いたたかたと願つてこねのです。

今月の開催は十一月十五日(土)二時からの予定になつておつまます。